

両毛漁業協同組合長 中島 淳志（桐生市川内町）

【略歴】奥羽大文学部英語英文学科卒。アパレル関係の仕事の傍ら、漁協に従事。2010年、組合長に就任。釣り専門誌に執筆し、フライフィッシング講師も務める。

魚道の重要性

◎生態系のバランス保つ

唐突だが、「魚道」とは何か？ そして「機能していない魚道」とはどんなものか？ 今回は魚道の重要性について少し述べたいと思う。

魚道とは字のごとく「魚の通路」である。日本では水産資源保護法というものがあり「さく河魚類の通路となっている水面に設置した工作物の所有者又は占有者は、さく河魚類のさく上を妨げないよう、その工作物を管理しなければならない」と定めている。さらに「農林水産大臣は、さく河魚類の通路を害する虞おそれがあると認めるときは、その工作物の設置を制限、又は禁止、工作物の除害工事を命ずることができる」といった「さく河魚類の通路の保護」に関する条例が設けられている。

「さく河魚類」とは、産卵期、あるいはそれに先立って海から河川に入ってくる魚類のことをいい、サケやマスは産卵期に、アユは幼時に河川を遡り上流へ上がることが代表的（農林水産関係用語集より）であるが、この条例があることにより、さく河魚類に対してだけでなく、他の魚類など、あらゆる水生生物に有効なものとなっているのだ。

ここで考えられる例として一つ川をイメージしてみよう。上流は山間部から下流は市街地に流れており、途中に堰せきを設置し分割するとする。魚によっては河川を自由に移動し、その先にその時必要な生活環境があるものもある。魚道のない堰はそういった魚の生活環境を奪ってしまうことになる。また、上流域にすんでいる魚が下流域まで降下してしまった場合、魚道があればその魚は再び上流域へ行くことができるが、堰で遮断されていたらそこですみやすい場所を見つけるか、もしくは生存が危ぶまれる。

それが繰り返されたらどうなるかというと、上流域の生態系は衰退しバランスが崩れるであろう。また、下流域ではこれまでいなかった魚が増えてしまうのだから、餌となる水生昆虫などがより多く必要となり、生存競争が始まって弱いものはいなくなってしまう恐れもある。結果、河川全体で生態系のバランスが崩れ、その河川本来の姿を失い、魚の生活史も変わってしまうであろう。このような状態をなくすためにも魚道は必要不可欠なのである。

かねてより魚道にはとても興味があり、自分なりに各地の魚道を調べたりしている。興味深い魚道はたくさんあるものの、小規模な河川になるほどずさんさが目立ち、また、建設当時と現在の河川環境も変わり、名ばかりの魚道と感ずるものが多いのも否めない。地元の河川でも魚道が必要な場所や、「機能していない魚道」がいくつもあり、前々からしるべき所へ魚道の見直しを訴えている。

今回はそんな「機能していない魚道」を、ある河川を例に述べたいと思う。